【特別講義要旨（2）'94.10.28】

人口法則に関する一考察

――マルサスを越えて――

大　淵　　寛
（中央大学経済学部教授）

世界人口は，人類生誕以降の数百万年間に少なくとも4回の大きな増加の波を経験したが，この人口の波は3回の画期的な技術革新と深く結びついている。最初は中期旧石器時代から後期旧石器時代への過渡期に見られた顕著な石器の進歩であり，他の二つは農業革命と産業革命であった。過去における人口の波と技術進歩とのこのような関連性を考えれば，'人口法則'は一般的に「ある特定の経済社会における人口と，所与の技術水準のもとで利用可能な資源との間に成立する相互依存的な諸関係」と定義することができよう。

もっとも古典的な人口法則として知られているのはマルサスの人口原理であるが，それは一種の人口・資源論である。そこで資源は土地あるいは農業資源を意味し，食糧に対する人口圧迫が主たる問題意識であった。時とともに資源概念は拡張され，1970年代からは環境資源をも含む広い範疇の概念に変わっているが，マルサス的な悲観論は現代でも広く受容され，『成長の限界』のような資源有限論が有力である。しかし，資源制約のなかった時代など過去に一度もなかったし，人口は画期的な技術進歩によって上限を乗り越え，新たな増加局面に突入してきた。もとより有限な地球で無限の成長を続けることは不可能であるが，来るべき高度技術社会で人口の第5の波が起こらないとだれが断言できよう。